

# 後期堀文学の方向性についての一考察

―「菜穂子」の「眼ざし」を手掛かりにして―

山 本 裕 一

## 一 はじめに

堀辰雄は、随筆や小品、単行本の後記の中などで、しばしば作品について自ら語っている。また作品の創作から推敲の過程にかけて、膨大な量のノートや書き込みを残している。それらの中に残された観念的な言葉やイメージは、作中で物語の語り手によって語られる事が多く、また登場人物の思念の中に現れることもしばしばである。そこで、私はそれらに注目し、堀がそれらについてどのように考えていたかという観点から分析を行い、その結果から作品を論じてきた。堀のような「頭のなかで」通りも二通りも考へておいてから、それから言葉を探しに出かける<sup>1)</sup>作家の理解には、それが有効だと考えたからである。今回も同様に、作品の中に頻出する「眼ざし」という一形象を対象として作品の分析を試みたい。もちろん、象徴はあくまで象徴であり、そこに完璧な解釈を求めることはできない。しかし、それは承知の上で、どうしても私はこの形象にこだわって見たい。私がこの形象にこだわるのは、このよう眼ざしの描写が単にこの作品だけでなくこの時期の他の作品に頻繁に見られ、「眼ざし」がこの時期の堀の意識の中に、色濃く影を落としていたと考えられるむきがあるからである。

或晩秋の日、女は夫に従つて、さすがに父母に心を残して目に涙を溜めながら、京を離れて往つた。(中略)「私の生涯はそれでも決して空しくはなかつた――」女はそんな具合に目を赫やかせながら、ときどき京のほうを振り向いてゐた。

(資料一 「嫉捨」、『文芸春秋』昭和十五年七月号発表)

一九三五年の冬の或る大雪の日だつた。いつもなら人の込み合ふ夕方近くなのに、そんな大雪のためにすつかり人けの絶えた銀座裏の或る珈琲店で、私は自分のほかに一人の「黒目が大きくて」、頬が異様にこげ、何処となく知的な感じのする「顔立ち」目つきをした若い女がゐたきりになつてしまつてゐるのに気がついた。(中略)何度も失敗して遂に全く断念してゐた或小説の女主人公の傍が(中略)鮮やかに蘇つてきた。自ら好んでのやうに人生の縛に囚はれてゐる或る若い女が、その女のやうに、外のはげしく吹雪いてゐるのを「見やりながら」うつけたやうに見やりながら、其処でつと何者かの来るのを待つてゐる。……

(資料二 「菜穂子」覚書、文末に一九四一年

八月十五日記とある)

しかし女は苦しうに男に抱かれたまま、一度だけ目を大きく見ひらいて男の顔をいぶかしうに見つめたぎり、だんだん死顔に変わりだしてゐた。……

(資料三 「曠野」、『改造』昭和十六年十二月号発表)

平刀良は寡黙になった。しかし心の中に何物か明るいものを持つてゐるやうに見えた。(中略)／＼私にその役を代らしてください。あなたは病氣とでもいふことにして。平刀良は急に激しくいった。荒蟲はびつくりしたやうに、顔をあげて相手を見た。平刀良は目だけでそれを制した。その目は異様に赫いてゐた。

(資料四 「出帆」末尾近く、「曠野」の後に書かれた

構想メモである)

資料一・三は、それぞれ「菜穂子」の前後に書かれた、堀の王朝ものとしては第二作・第三作になる「姨捨」「曠野」の末尾近くの文章で、いずれも昔気質の親を持つ女主人公の描写である。「姨捨」は「更級日記」、「曠野」は『今昔物語集』卷三十の四、『伊勢物語』六十二段およびその類話をもとにして書かれたものであるが、これらの作品の末尾部分は原典とはおよそ様変わりしたものになっている。そして、これらの作品では、主人公の内面は語られず、その「目」で象徴されているのである。また、資料二・四は、堀が残した創作ノートの一部であるが、いずれもイメージや心理描写の上で目が重要な位置を占めている。これらの資料を通してみれば、堀がこの時期「目」の描写に何らかの意味を与えようとしていた、ということはまだいあるまい。

堀辰雄は、その出世作「聖家族」においては「内部が外部と同様に恰も肉眼で見得られる対象であるかのごとく」<sup>②</sup>明瞭に登場人物の心理描写を行っていた。また、中期の「物語の女」「風立ちぬ」などでは、登場人物の内面の苦しみを、プルーストの「無意識」の方法などを借りて詳細に描きこんでいた。しかし、その後期の作品において、作中

人物は他の作中人物の視点からその外見を語られることが多くなり、内面(心理)は、多く象徴的な人物描写や風景描写として表現される傾向が強くなっている。その代表的な一つの形象がこの「目」なのである。してみれば、この「目」に現れる堀の意識の分析を通して、後期堀文学について幾分か考えを深める事が可能なのではあるまいか。

本稿では、「菜穂子」<sup>③</sup>を対象とし、その中に描かれた、五十を超える「眼ざし」及びその類似表現について考察する。なお、作品中に「空けたやうな眼ざし」<sup>④</sup>が多出していることや「見入る」行為の描写が多出する事についてはすでに竹内清巳、林喜代他数多くの方の指摘がある。そして、作品内には、確かにその指摘のように「空けたやうな」<sup>⑤</sup>「見据える」眼ざし、「見つめる」姿の描写が頻出している。しかし、作品に描かれた眼ざしは決してそれだけではない。眼ざしの描写は、冒頭の明と菜穂子の邂逅をはじめとして、登場人物が互いにかかわる場面に多く描かれ、単に登場人物にある性格を付与するにとどまらず、人間関係やその間の心情の変化を表現するのにも使われているように思われる。そこで今回は「菜穂子」に出て来る「眼ざし」をその内実の分析・推移の検討という点に重点を置いて分析し、登場人物ごとに論じていくこととする。

## 二 都築明の「眼ざし」について

「A」 明が見る「眼ざし」

一 「空虚な眼ざし」「宙に浮いた眼ざし」(菜穂子)

二 「空を見いつてゐたやうなあの時の眼ざし」「あんな空虚な眼ざし」「あの人の眼つき」(以上菜穂子)

四 「目が尋ねてゐるやうに彼には見えた」(所長)  
「考え深さうな暗い眼つき」(三村夫人)

十三 「どうして好いかわからないやうな不安な眼つき」（早苗）

十七 「何か咎めるやうなきびしい眼つき」「そんな彼女の目つき」「いかにも冷やかな目つき」「元の冷やかな目つき」

「お互に怒つたやうな目つき」（以上、菜穂子）

## 〔B〕 明の「眼ざし」

二 「何か感謝に充ちた目」

五 「空けたやうな眼ざし」

八 「彼女を通してもつと向うにあるものを見つめてゐるやうな目つき」「そんな明の目つき」「さつきから空を見つめ続けてゐるその目つき」

十七 「大きな眼」「眼を大きく見ひらいて」「同意を求めるやうな眼つき」

「本当に困惑したやうな眼つき」「そんな風な想念を眼ざしに籠めながら」「大きい眼」

二十 「うつとりとした眼つき」

明に關係して描かれている眼ざしのうち主なものをあげた。こうやって眺めてみると、そこにある傾向があるのに気付く。明は、冒頭近くでは他者の視線に敏感であるが、早苗との出会い以降は空を見つめ、そして菜穂子との再会では彼女の冷たい視線に「大きい眼」で対しているという傾向である。以下、小説の展開にしたがつて、考察を加えていく。

「菜穂子」は、往來で「空けたやうに」たたずんでいた明が、菜穂子の「宙に浮いた眼ざし」に気付くところからはじまっている。そし

て、そのことで、それまで「何と云ふ事もなしに過して」いた明は、「兎に角も一つの目的を持つてゐた」のに、今はそれが「永久に彼ら失はれてしまった」やうに感じる。この「目的」とは何であろうか。往來で空けたやうにたたずむ彼から現実的な目的は想像しにくい。また、明は次章で「仕事に全身を奪はれることはあつても」「心からそれを楽しいと思つたことは一度もなかつた」と記され、「お前はこんなところで何をしてゐる」という何物かの声を時々聞いているともされている。だとすれば、「目的」は仕事・人生上の目的でもありえない。明は、菜穂子と出会う事で何を失つたというのであろう。

彼は、菜穂子との出会いの後、仕事を手になくなる。そして、少年時代の追憶にふけてゐる。さらには、少年時代を過ぎたO村へと旅に出、最後の夏の想い出に浸る。そこで彼は「永久にこつちを振り向いてくれさうもない少女」菜穂子のことを考えかけて、「もう此処へは再び来まい」と決心する。このような行動から逆に考えれば失われたものは菜穂子である。そして「本能的に夢を見ようとする少年」として、夢から「目覚めようとする少女」菜穂子と共にあつた彼の少年時代の赫やきである。彼は夫と歩いている菜穂子を見る事で、それが既に失われてしまつてゐることをはつきりと認識したのである。

明の求めるものが菜穂子と共にあつて夢みていた頃の自分であることは明の言動からも推定する事ができる。彼は十七章において菜穂子に「自分のしてみたいと思ふ事は何でもしてしまはうとするやうな一面を再確認されているが、二章では、「今の為事をやめてしまつて、さてその自分にすぐ新しい人生を踏み直す気力があるかどうか自分自身にも分かつてゐない事に気がつ」いて、休暇を貰う。十六章では「遠慮ばかりしてゐて一体俺はどうなる？」と自答している。彼が夢を追う真摯な一面を示しているのは、菜穂子という時だけなのであり、菜穂子とすることで昔の自分を取り戻しているのである。

また、十七章で明はサナトリウムへの訪問の目的を「ほんの一瞬間、

昔のやうにお互いに怒つたやうな眼つきで目を見逢はせ」ることであると考え、「昔のやうに」「自分の痕を相手にぎうぎう捺しつけ」ずいられなくなつてきたので、早く帰ろうと考える。明は菜穂子の安否を気遣うためではなく、菜穂子と共にあつた昔の感覚を求めて菜穂子を訪問しているのである。これらは、失われた昔の自分を希求する明の内面を語つていよう。このように見てくると、先述の感覚は、菜穂子の昔と変わらぬ眼ざしが、明に「夢を見よう」とした昔を想起せしめ、夢見ようとするをやめている現在の彼を告発したということを表現していると言へはすまいか。

なお、ここで注意しておきたいのは、これほど大きな内面の変化を生み出したものが、菜穂子の「眼ざし」でしかなかつたという点である。明は、所長の目つきからも動揺をきたしており、彼の他者の眼に敏感で神経質な一面がここからは読み取れよう。

明は、その後O村へ行き、そこで出会つた早苗と恋をし、氷室で逢引するようになる。しかし、明は早苗と会いながらも、直接何かの言動に出る事はない。いつも「空けたやうな眼つき」で遠くを見つめる姿ばかりが描かれている。その目が赫やくのはわずかにおえふのロマネスクなエピソードを聞く時ばかりである。

明はときどき娘の方へ目を注いで、いつまでもちつと見つめてゐる事があつた。娘がなんと云ふ事もなしに笑ひ出すと、彼は怒つたやうな顔をして横を向いた。(中略)さう云ふ彼が娘にもだんだん分かつて、しまひには明に自分が見られてゐると気がついて、も、それには気がつかないやうにしてゐた。明の癖で、彼女の上を眼を注ぎながら、彼女を通してそのもつと向うにあるものを見つめてゐるやうな眼つきを肩の上に感じながら……(八)

彼は早苗の「神々しいやうな顔つき」「無心さうにしてゐる様子」を見る事で満足し、直接何も行動しない。このことについて吉村貞司は、ロマネスクを求めて早苗に慕い寄つても、菜穂子の存在の大ききた

めにそれに踏み切るリビドーが欠如しているからという。しかし、作品全編に明の菜穂子への愛情の表出と取れる表現はなく、別な箇所では明は初枝母子に対し「運命を共にでもするやうになつたら」とも考えているのであるから、それは考えにくい。また、明は一緒にいる時も、何も話さないで、相手に口も聞かせない。あげくは早苗が笑いだそうとすると怒つた顔をするのである。もはやここに描かれているものは他の愛によつて行動を束縛された男の姿でも恋する男の姿でもない。奇妙なことだが、この部分からは、彼は現実の女性として彼女を求めたのではなく、彼女に見たイメージ(神々しさ・無心)を求めていたとしか思えない。このことについては堀自身がおトに記している次の言葉に如実に語られているであろう。

(前略)黙つてゐる娘の方が、その娘に求めているimageに似つかはしいのだ。そのためににやつてくる破局……

先述のような恋愛が長続きするはずもなく、やがて明と早苗との間に別れが訪れる。しかし、明はそれすら自らが望んでいた事で、自分にはその別れの切実さが必要だつたのだと言ひ聞かせる。これもまた、自らの描いたロマネスクなイメージを現実に求めていると言えよう。明は現実を見ていない。現実の娘を、そして別れを通して自らの求めるイメージを求めている。この場面に一貫して描かれている「空けたやうな」眼が「遠くを見つめる」のは、自らの内にあるイメージを追い求めるこのような明の精神性を示しているのである。

やがて明は旅を終えて帰京するが、検査のため上京したOおえふ母子の帰村を見送ると、心の空しさを覚え、再び旅に出る。その行動の基底にあるのは「自分が本気で求めてゐるものは何か」「心からしたいと思つた事をこれまでに何一つしたか」「本気で求めてゐたと云へるか」という実存的な問いである。彼は、その旅の途中で菜穂子を訪問する。ここで注意したいのは、ここでは明はもはや「空けた」眼ざしではなく、変わつて「大きな眼」を三度強調されているという点であ

る。そして、菜穂子はその眼差しに対し、常に「冷ややかな目つき」でこたえているという事である。たとえば、次の通りである。

「別に何処つて……」と明は自問自答するやうに口籠つてゐた。それから突然目を思ひ切り大きく見ひらいて、自分の云ひたい事を云はうと思ふ前には、相手も何もないかのやうな語気で云つた。「急に何処といふあてもない冬の旅がしたくなつたのです。」菜穂子はそれを聞くと、急に一種のなが笑ひに近いものを浮べた。それは少女の頃からの彼女の癖で、いつも相手の明なんぞのうち少年特有な夢見るやうな態度や言葉が現はれると、彼女はさう云ふ相手を好んでそれで揶揄したものだつた。(十七)

ここでは、彼の大きい目は「云ひたい事を云はうと思う」行為の前ふりとして使われている。また、引用のあとの部分では「自分のしたいと思ふ事は何でもしてしまはうとするやうな烈しい一面」が明にあらつたことを菜穂子に想起させた上で、明は最後に菜穂子に「大きい眼を注いで」立ち去つていく。したがつて、大きい目は明のしたいと思ふ事をする希求の強さを象徴している、少なくとも密接な関係をもっているように思われる。そしてそれを導きだしたのは菜穂子の少女の頃からの癖となつている話し方や眼ざしであつた。

このように見てくると、明の物語は、他者の視線に敏感であつた、つまり現実の人間関係に強くしばられていた明が、昔同様に夢から覚めようとする菜穂子の眼ざしによつてその夢見ようとする性格を再燃させ、次第に自己の内面の希求を強めていく物語であると読める。そして、明の眼ざしの変化——他者に向けられた眼から、「空けたやうな」眼へ、さらに「大きい眼」へという変化は、その次第に強くなつていく明の希求の強さと呼応しているのである。

### 三 黒川圭介の「眼ざし」について

次に菜穂子の夫黒川圭介について見ていく。堀自身が苦手意識について発言している事もあり、圭介は、「圭介の影は薄い、それがもつと濃く現れていたら、小説は今あるものとはかなり違つた形をとつていたるう」「まるで紙から切りぬかれた人形である」「生活観のない「俗っぽい」という類型概念だけのやうな気がする」など造型の失敗を指摘される事が多い。が、眼ざしから見る限り、堀の彼に与えようとした役割が失敗しているとはかりはいえない。明との対比で見えていくと、そこには菜穂子の魂を受け止め得ない凡人としての圭介が描きこまれているからである。以下、その事について論じたい。作品中の圭介にかかわる眼ざしの描写のうち、主なものを次にあげる。

#### 「A」 圭介が見る(想像する)「眼ざし」

六 「さう云ふ菜穂子の眼ざし」(菜穂子)

十一 「鳥のやうに大きく見ひらいた眼」(患者)

「無気味なほど大きな眼」「少し窶れたせいか一層大きくなつたやうな眼」「急に暗く陰つた眼」(以上菜穂子)

「死にかかつた鳥のやうな無気味な目つき」(患者)

「何か彼を憐れむやうな目つき」「こんな目つき」

「揶揄するやうな眼ざし」(以上菜穂子)

十二 「そんな目つき」(菜穂子)

「瀕死の患者の無気味な眼つき」(患者)

「空けたやうな眼ざし」(菜穂子)

「瀕死の鳥のやうな病人の異様な眼つき」(患者)

「痛々しい眼ざし」「絶えず自分につきまとうて来る菜穂

子の眼ざし」(以上菜穂子)

十四 「その眼ざし」(菜穂子) 「菜穂子に似た眼つき」(別人)

十九 「そんな眼つき」

二十三 「癖のある眼つき」(以上菜穂子)

### 「B」 圭介の「眼ざし」

十一 「思ひきつて探るやうな目」

十二 「空を見つめてゐるだけの自分自身の眼つき」「空けきつた眼」

「それを知らず識らずに真似をしてゐたやうな自分自身の眼つき」

十四 「まるで食ひ入るやうな眼つき」

「何か痛いやうな眼つき」「食ひ入るやうな眼つき」

二十四 「小さな眼」

これらの描写を見てみると、圭介が菜穂子の眼ざしに終始脅かされている事、サナトリウムでの菜穂子との話し合いを機に圭介の眼つきが菜穂子の「空けたやうな眼ざし」に同化しかかっている事、そしてそれ以後「食ひ入るやうな眼つき」で菜穂子のことを求めるようになってくる事がわかる。つまり、平凡な男であった圭介が菜穂子の眼ざしによつて刺激を受け、菜穂子の側にすりよつていく姿がうかがわれるのである。以下、詳しく見ていく。

ある朝、菜穂子は咯血し、そのことを圭介に告げる。顔色を変えた彼を彼女は「ぢつと見つめ返」すが、彼は「さう云ふ菜穂子の眼ざしから顔を外」らす。六章に描かれているこの図式は、以下、何度も繰り返され、二人の関係——菜穂子の生を受け止め得ない圭介——を象

徴するものとなつてゐる。

十章では、彼は遠縁の者の話から母親が菜穂子の入院を言いふらしていたことを知り、母親への信頼を失う。彼は急に見舞いに行くといひだし、菜穂子が重体で死にかけているかもしれないという不安に駆られ、菜穂子に会いに行く。菜穂子への愛情ではなく、母親への不信がその行動の基点であるという点において、また、俗人・凡人として描かれるはずであった彼が「いきなり堀辰雄の眼を持つて」しまつてゐるといふ点において、唐突な感が強いが、それだけに堀がこの場面を描こうとした意図の強さが感じられる。

菜穂子との再会の場面(十一章)では、圭介は途中であつた患者のやうな「鳥のように大きく見開いた眼」で見られるのでは、と恐れていたが、菜穂子の「大きな眼」の赫やきを見て安堵する。そして、いつもの癖で「眼を外らせながら」安否を氣遣う圭介に、菜穂子は黙つて頷く。以下はそれに続く場面である。

圭介はさつき思はず目に入れたあの咯血患者の死にかかつた鳥のやうな無気味な目つきを浮べながら、菜穂子の方へ思ひ切つて探るやうな目を向けた。／＼しかし彼はそのとき菜穂子の何か彼を憐れむやうな目つきと目を合はせると、思はず顔をそむけ、どうして此の女はいつもこんな目つきでしか俺を見られないんだらうと訝りながら、雨のふきつけてゐる窓の方へ近づいて行つた。(十一)

彼は、やはり菜穂子の眼ざしを受け止めることができない。帰り際、彼は菜穂子に「後生だから、お前、そんな目つきでおれを見ることだけは止めて貰へないかな。」と「相変らず彼女から眼を外らせながら軽く抗議」するのであるが、これも目を外らしている限り先の図式の範囲を出ていないことは明らかである。しかし、サナトリウムからの帰り、圭介は、その菜穂子の眼ざしをうるさがらず、圭介自身の眼ざしも菜穂子に同化しかかつていく。そしてこの場面では、圭介も眼ざ

して内面の変化が表現されている。

いま一心に窓外を見ようとしながら何も見えないので空を見つめてゐるだけの自分自身の眼つきが、きのふ山へ著くなり或半開の扉のかけからふと目を合はせてしまつた瀕死の患者の無気味な眼つきに感ぜられたり、或はいつも自分がそれから顔をそらせずにはゐられない菜穂子の空けたやうな眼ざしに似ていくやうな気がしたり、或はその三つの眼ざしが変に交錯し合つたりした。……

(十二)

これは「心が疲れてゐる」圭介の疲労が主な原因とされているが、菜穂子との再会が与えた異常な興奮、「生と死の絨毯」と表現されるサナトリウムの雰囲気も大きく関与していることは間違いない。彼が覚醒した後にも、次のように描かれてゐるからである。

もうあの瀕死の鳥のやうな病人の異様な眼つきも、それを知らず識らずに真似してゐたやうな自分自身のいましがたの眼つきもけろりと忘れ去り、唯、菜穂子の痛々しい眼ざしだけが彼の前に依然として鮮かに残つてゐるきりだつた。……(十二)

彼は東京に帰つてきても、大勢の人の中で自分だけが「山から自分と一しよに附いて来た何か異常なもので心を充たされてゐるのだ」と悲痛な気持ちになり、大森の家に帰つていく気がせず銀座をぶらつく。以下は、その時の圭介の描写である。

彼はその間も絶えず自分につきまとうて来る菜穂子の眼ざしを少しもうるさからずにあつた。しかし、ときどき彼の脳裡を掠める、生と死との絨毯はその度毎に少しづつぼやけて来はじめた。彼はだんだん自分の存在が自分と後となり先になりして歩いてゐる外の人達のと余り変わらなくなつて来たやうな気がしだした。(中略) 彼は何物かに自分が引き摺られて行くのをもうどうにもしようがないやうな心持ちで、遂に大森の家に向つて、はじめて自分の帰らうとしてゐるのが母の許だと云ふ事を妙に意識しながら、

十二時近く帰つて行つた。(十二)

圭介は、明同様に菜穂子の眼ざしから強く刺激されながら、菜穂子のいる「生と死の絨毯」の世界から、「母」のいる日常生活空間に「引き摺られて行く」ように帰つていく。これは明が菜穂子の眼ざしに刺激されつづけ、再会の後あくまで夢を買い旅を続け、死を迎えようとするのと対照的である。

彼は十四章では「まるで食ひ入るやうな眼つき」「何か痛いやうな眼つき」「食ひ入るやうな眼つき」でサナトリウムの方へ行く電車を見つめ、電車の中では菜穂子の眼ざしを感じて、彼女の眼つきに似た女がいたのかと探し出す。これは菜穂子を求める彼の切実な気持ちのあらわれである。しかし、ここでもまた、終電とともに「一日ぢゆう何か彼を息づまらせてゐたもの」が引き離されるのを感じるだけで行動にはつながらず、日常の生活空間から一步も出るわけでもない。しかも、二十三章の段階では、「菜穂子のことで何かはげしく悔いるやうな事も無くなり」「面倒のない生活に一種の不精から来る安らかさを感じて」と描かれてゐる。また、同じ場面では菜穂子との心の交流を引きとめたいと考えながらも、同時に母の顔を思いだしてゐる。

以上のような点を総合して考えると、彼は、母に代表される日常的なもの・習慣的な世界に強く牽引されている人間であり、その意味で堀のいう俗人であつて、明と対照的な存在であるといえよう。菜穂子は、圭介との別れに際して、彼女の決意が受け止められず「以前の習慣どほり」の夫婦になつてゐる自分達を省みて、「ほんたうに人間の習慣には何か瞞着させるものがある」との感懐を抱くが、まさしく、そのような世界の住人なのである。

このような圭介と菜穂子との間に「真の夫婦愛の誕生」を見ることはできない。しかし、次のような場面からは、圭介が菜穂子の側に歩み寄る可能性も読み取れる。

菜穂子はさう思ひながら、しかしもうどうでも好いやうに、夫

の方へ、何か見据えてゐるやうな癖に何も見てはゐないらしい、例の空虚な眼ざしを向け出した。／＼圭介はこんどは何か抜きさしならない気持ちで、それをちつと自分の小さな眼で受けとめてゐた。(二十三)

菜穂子の「大きい眼」に対して圭介が「小さい眼」とされていることは無作為ではあるまい。その大きさは菜穂子や明のように夢を求めえない俗物性が反映されていると思われるが、しかし、圭介はここではじめて、それまで目を外らさずにいられなかつた菜穂子の視線を受け止めている。別な場所では空けたようになりかける圭介の描写もあり、菜穂子の生をしっかりと受け止めるべきだがここにはある。堀が圭介を通して書きたかつたものは、この「俗物」圭介の「覚醒」、「母」に代表される日常的空間からの救済ではなかつたか。もちろん、彼が変革していくにはまだ時間が必要であらうが。

なお、このような圭介の延長線上にあると思われる次作「曠野」の「男」には、もつと確かな形で生の継承が描かれている。「曠野」の男は女の愛の烈しさを受け止められず、連れ添つた妻と別居する。その後訪ねて行こうとするが、圭介と同じく「急に何物かに阻まれるやうな心持ち」で自分の生活空間へと引き返す。また、いてもたつてもいられなくなつて訪ねて行くが、女がいないことを知ると「快い物思ひ」を感じている。これらの設定と圭介の設定との類似と、男が国主となつた後に女を侍らせ、しかも女が昔の妻であつたことに気がついていないとされている点とを総合して考えると、俗物という点において男は圭介の後身といつても過言ではあるまい。しかしその男は作品の最後において、次のような感懐を見せる。

「しつかりしてゐてくれ」男は女の背を撫でながら、漸つといま自分に返されたこの女、——この女ほど自分に近い、これほど貴重なものはゐないのだといふことがはつきりと身にしみて分かつた。(中略)この女こそこの世で自分のめぐりあふことの出

た唯一の為合せであることをはじめて悟つたのだつた。

女はこの後、一度だけ眼を大きく見開いて男の顔をいぶかしそうに見つめて死んでいくのであるから、両者の間に愛情が再燃したとは考えにくい。しかし、少なくとも、女の愛情をしっかりと受け止めている男の姿が描かれていることについては間違いないが、女の生は男へと受け継がれているのである。もちろん、「曠野」は「菜穂子」と別の作品であり、そこからこの作品を論じるのはおかしいが、圭介と男とを比較することで、圭介の菜穂子の生を継承する可能性を理解しやすくなるかと思われるのでここに記しておく。

#### 四 菜穂子の「眼ざし」について

次はこの作品のヒロイン菜穂子の眼ざしについて見ていく。作品に現れる菜穂子にかかわる眼ざしの描写の主なもの以下の通りである。

「A」 菜穂子が見る(考える)「眼ざし」

七 「血走つた目つき」(許嫁危篤の青年)

十二 「少し険を帯びた眼ざしらしいもの」(想像上の姑)

十五 「一枚の木の葉を不思議さうに見守つてゐる自分の目つき」「こんな私の目つき」(以上菜穂子)

十七 「何か決意したところのあるやうな生き生きした眼ざし」(技師)

十七 「笑を含んだ目」(看護婦)「大きな眼」「眼を大きく見

ひらいて」「同意を求めるやうな眼つき」「本当に困惑したやうな眼つき」「大きい眼」(以上明)

二十三 「小さな眼」(圭介)

「B」 菜穂子の「眼ざし」

- 一 「空虚な眼ざし」 「宙に浮いた眼ざし」
  - 二 「空を見入つてゐたやうなあの時の眼ざし」 「あんな空虚な眼ざし」
  - 七 「我知らず貧るやうな目つき」 「無気味なほど大きな眼」  
「少し窶れたせいが一層大きくなつたやうな眼」 「急に暗く陰つた眼」  
「何か彼を憐れむやうな目つき」 「こんな目つき」 「揶揄するやうな眼ざし」
  - 十二 「空けたやうな眼ざし」 「痛々しい眼ざし」  
「絶えず自分につきまとうて来る菜穂子の眼ざし」 「その眼ざし」
  - 十七 「何か咎めるやうなきびしい眼つき」 「そんな彼女の目つき」  
「いかにも冷やかな目つき」 「元の冷やかな目つき」 「怒つたやうな目つき」
  - 十九 「見据ゑるやうな眼ざし」 「そんな眼つき」
  - 二十三 「何か見据ゑるやうな眼つき」 「大きい眼」 「癖のある眼つき」  
「何か見据ゑてゐるやうな癖に何も見てはゐないらしい、例の空虚な眼ざし」
- 一見して、空を見つめる眼ざしの多いことが分かる。これは、明や圭介から何度も確認され、また、以前からそうであったとの回想もさされてるので、諸氏の指摘されている通り菜穂子の造型の重要な部分を構築しているといえよう。しかし、その眼ざしが他に様々な表現を

なされていることを見逃してはなるまい。まず空を見つめる眼ざし以外の描写がなされている箇所から、彼女の心の動きについて考えてみよう。

彼女の眼ざしが、別な表現で描かれている所は、許嫁の為に泣く青年、死を覚悟で下山する青年技師、明、圭介と関わる部分である。

菜穂子が初めに空虚以外の眼ざしで見つめるのは、許嫁が危篤から持ち直したことを喜んで病人にもわかるほど嬉し泣きに泣きじゃくる青年である。彼女は最初は事情を知らず、許嫁が死んだものと思つて「見るに忍びないやうに、いそいで」通り過ぎるが、事情を知つた後では、「我知らず貧るやうな眼つき」で青年の肩に見入り、その傍を「大股にゆつくり」通り過ぎる。その日から「妙に心の重苦しいやうな日々」を送つた彼女は、娘が死に、青年が姿を消した時にその「重苦しいものからの釈放」を感じる（七章）。

また、医師の忠告も聞かずに、自分の研究を完成するために下山しようとしている若い農林技師に対しては、「何か切迫した生気が眉宇に漂つてゐる所に好意を感じる（八章）。この技師は後にサナトリウムに戻ってくるが、その折には、「そのときの何か決意したところのあるやうなその青年の生き生きした眼ざし」に強く心を動かされたことを思い出し、彼に「他人事でないやうな氣」を感じている（十五章）。

菜穂子は明らかに青年や技師に見られる誠実で真摯な生の姿勢に強い関心を示している（サナトリウムにやってきた義母に感じる虚偽も、その裏返しであろう）。しかし、同時にそれを重荷とも感じている。この事は、明との関わりにおいて、より鮮明な形で記されている。

三章において菜穂子は母三村夫人の死によつて「自分を伴つてまで」よそよそしい生活に「堪へてゐる理由が少しも無くなつてしまつたやうに」感じる。そして、「結婚前の既に失はれた自分自身に対する一種の郷愁のやうなもの」を募らせながらも菜穂子はおおそれに堪えていくやうとしている。ところが明との邂逅は、その菜穂子に夫と外出した

りするのを不快に感じさせる。菜穂子に「自分を伴っていると云ふ意識」をはっきり意識させているのである。

この「自分を伴っていると云ふ意識」については、サナトリウムでの明との再会の場面（十七章）において菜穂子は再び意識させられている。菜穂子は「大きな眼」ではっきりと意志を伝える明に終始冷たい眼ざしで接するか、もしくは眼をつぶるという形で描写され、明と距離を置こうとする姿が強調されている。そして明が別れを告げる時には「何物かから釈き放されるやうな感情」を味わい、「自身自身に伴つてゐた感情」を自覚したとされている。そしてその内実は、菜穂子自身の言葉によれば「自分の生のぎりぎりのところまで行つて自分の夢の限界を突き止めてこようとしているやうな真摯さ」を相手はもちろん、自分自身にさえはつきり肯定しようとしなかつた瞞著である。彼女はここにおいて、真摯な生にひかれながらも、それを重荷に感じ、素直に受け入れようとしなかつた自分の瞞著に気付いている。

菜穂子は、以後、自らの孤独を切実な問題として考え、夫の手紙の中に何かを求め何度も読み直すようになり、そして東京行を決行する。それが彼女をその惨めな孤独から救つていくのであるが、ここで今度は彼女の空虚な「眼ざし」について考察してみたい。

しかし一方、彼女はよみ返ればよみ返るほど、漸くかうして取り戻し出した自分自身が、あれほどそれに対して彼女の郷愁を催してゐた以前の自分とは何処か違つたものになつてゐるのを認めない訳には行かなかつた。彼女はもう昔の若い娘ではなかつた。

もう一人ではなかつた。不本意にも、既に人の妻であつた。その重苦しい日常の動作は、こんな孤独な暮しの中でも彼女のする事なす事にはもはやその意味を失ひながらも、いまだに執拗に空を描きつづけてゐた。彼女は今でも相変らず、誰かが自分と一しよにゐるかのやうに、何んと云ふ事もなしに眉をひそめたり、笑をつつたりしてゐた。それから彼女の眼ざしはときどきひとり

に、何か気に入らないものを見とがめでもするかのやうに、長いこと空を見つめたきりでゐたりした。（七）

菜穂子は、サナトリウムに入ると孤独の中の蘇生の喜びを感じる。しかし、同時にその様な生活に対する疑念をも抱いている（この構造は以後作品中で何度も繰り返される。そして、次第にその疑念が大きくなつてゐる。真摯な生を生きる欲求と、それを隠蔽せんとする彼女の心の葛藤はこのやうな所にも現れてゐる）。右にあげたのは菜穂子がサナトリウムに入つてまもなくの感懐であるが、「何処か違つたもの」という言葉から、サナトリウムでの生活への彼女の疑念が幾分感じられるであらう。

しかし、また、ここで注目したいのは、「何か気に入らないものを見とがめでもするかのやうに」空を見つめてゐる彼女の眼ざしである。彼女は一人になつたのであるから、日常の慣習からは自由なはずである。にもかかわらず、彼女は心にもない表情を作るなど日常の慣習から容易に抜け出せていない。そして、そのような虚偽・慣習に彼女は「何か気に入らないものを見とがめでもするかのやうに」眼ざしを向けるのである。菜穂子は、九章でも、姑に虚偽的なものを感じ、「何か気に入らないものやうに」「空けたやうに」姑を見据えている。二十三章では「人間の習慣には何か瞞著させるものがある」と思いながら、圭介に「空虚な眼ざし」を向けている。これらを総合して考えると、「空けたやうな眼ざし」にはそうした現実の虚偽や慣習に抗する彼女の心情の投影という一面があるように思われる。菜穂子は彼女を取り巻く現実の虚偽や慣習に妥協することは出来ない。それが彼女に空虚な目を投げさせる理由の一つではあるまいか。

菜穂子は、青年や農林技師への眼ざしに見られるやうに真摯な生を希求している（それは「結婚前の既に失はれた自分に対する一種の郷愁」という言葉でも語られており、明同様に、その真摯な生の原形が「夢から覚めよう」とした少女時代にあることがわかる）。しかし、明

に對する冷たい眼ざしに象徴されるように、それを認めることを自らに禁じている。そのことは「伴つてゐるといふ意識」「重苦しいもの」となつて彼女を内側から告発しているのであるが、彼女はじつとそれに堪えている。しかも、現実の虚偽や慣習に向けられる空虚な眼ざしからわかるように、菜穂子は現実にと妥協することもできない。彼女の眼ざしはそのような心の有り様をうまく象徴している。眼ざしに現れたこのような心の閉塞状況から抜け出すには、三人の真摯な生、特に明の生に強く触発される事が必要であつた。

二人の青年や明の真摯な生に感銘を受けた菜穂子は、夫圭介にその生の伴侶としての役割を求める。しかし、それは常に裏切られていく。

「まあ、あなたでしたの？」菜穂子は漸つとふり返ると、少し裏れたせるか、一層大きくなつたやうな眼で彼を見上げた。その眼は一瞬異様に赫やいた。／圭介はそれを見ると、何かほつとし、思はず胸が一ぱいになつた。／「一度来ようとは思つてゐたんだがね。なかなか忙しくて来られなかつた。」／夫がさう云ひ訣がましい事を云ふのを聞くと、菜穂子の眼からは、今まであつた異様な赫きがすうと消えた。彼女は急に暗く陰つた眼を夫から離すと、二重になつた硝子窓の方へそれを向けた。(十一)

彼女はそれが返事の代りであるやうに、只大きい眼をして夫の方をぢいつと見守つた。何も云はなくとも、その眼の中を覗いて何もかも分かつて貰ひたさうだつた。／(中略)菜穂子は自分が何か思ひ違ひをしてゐた事に気がつきでもしたやうに、深い溜息をついた。(二十三)

ここでも、眼ざしの描写が、その心理をうまく表している。双方で菜穂子の眼が、「大きい眼」になつてゐるのは、あるいは病人特有のものであるかもしれないが、明の「大きい眼」についての説明を援用すれば、圭介にかける菜穂子の期待の大きさを示しているとも言えよう。また、そう考えなくとも、前者に見られる目の赫やきと言ひ訳を聞く

だけですぐにかける眼ざしや、後者に見られる「何もかもわかつて貰ひた」そんな眼は圭介にたいする期待と失望の大きさをうまく表現しているのではあるまいか。

以上、菜穂子の眼ざしの分析を通して、「空けたやうな眼ざし」で象徴される菜穂子のより微細な心の動きがその眼ざしの描きわけからうかがえること、菜穂子が現状からの唯一の救いと考へたのが、夫圭介との語らいであり、そしてそれに常に裏切られてきてゐることなどを見てきた。では、この作品の末尾において、菜穂子は孤立してゐるのだろうか。もはや詳しく述べる余裕はないが、彼女の行動が「新しい人生の道をそれとなく指し示してゐて呉れるやうに思はれて来た」(二十四章)という彼女の感懐につながるものである以上、ノートにかかれたやうな「夫婦愛の誕生」というものではなくとも、そこに彼女が虚偽的な日常から脱出する方向性をつかんでゐることは確かであろうと考えられよう。

## 五 生の継承について

ここまで、明、圭介、菜穂子の眼ざしを手掛かりとして作品を分析してきた。二では他者の眼ざしの間、即ち日常生活に埋没してゐた明が、菜穂子の眼ざしによつて、自らの夢に目覚め、次第にその希求を強めていく姿を追つてきた。また、三では、菜穂子の眼ざしを受け止め得なかつた平凡な男圭介が、菜穂子の眼ざしを受け止め、それと同一化しけながら、日常世界へと回帰して行く過程とその覚醒の可能性について見てきた。そして、四では種々の眼ざしによつて表現し分けられてゐる様々な思いに引き裂かれながらも、真摯な眼ざしに刺激され、菜穂子が自らの現状を打開するべく日常に働きかけていく様子を簡単に見てきた。

このように見てくると、この作品には、日常の習慣に絶えず牽引さ

れつつも、真摯に生きんとする他者との関りによって自らの内なる真摯な生への希求を覚醒される三人の内面が孤独なモノローグとして描かれていると考えることが出来る。この作品において登場人物がその内面において深く切り結ぶことはない。しかし、彼らの眼ざしは互いに交錯している。そして彼らは互いの眼ざしによって日常的なものからの脱出へと導かれている。その意味で、明と菜穂子の生は他者によって継承されているのである。それは死を前にした明が雪煙が上がるのを見る場面において次のような感懐で示されている。

「おれの一生はあの冷い炎のやうなものだ。——おれの過ぎて来た跡には、一すぢ何かが残つてゐるだらう。それも他の風が来ると跡方も無く消されてしまふやうなものかも知れない。だが、その跡には又きつとおれに似た者がおれのに似た跡を残して行くにちがひない。或運命がさうやつて一つのものから他のものへと絶えず受け継がれるのだ。」(二十一)

この雪煙の形象と類似の形象は、後に「楡の家」として「菜穂子」に組み込まれる「物語の女」への書き込みや、堀辰雄の最後の作品「雪の上の足跡」(『新潮』昭和二十一年三月号)などにも見え、この時期に彼が生が継承されるという運命観をもっていたことはまちがいが無い。彼がなぜこのような運命観を持ったのか、なぜここにこのような形象を描いたのかについては時代をふまえた上でなお一考を要するであろう。しかし、少なくとも、ここまでに見てきた「眼ざし」の考察を頭に置く時、この感懐は「明はまさしく孤独である。而もそれは如何なる慰めもない永遠の孤独であり、一すぢの黎明の光も洩れぬ夜の果てである」という絶対的な孤独を描いたものとは思われない。そこにはこの作品の眼ざしの描写に象徴されるように、真摯な生が確かに継承される事に対する堀の期待を感じることが出来る。そしてこれこそが、この作品の、主題の一つであり、この後に書かれた「曠野」を考へに入れる時、後期堀文学の目指した方向性でもありと考へられる

のである。

(注)

本文の引用は、すべて筑摩書房版全集第二巻によった。ただし漢字はすべて新字体に直して使用した。

本論文は一九九三年九月二十六日に大分県労働福祉会館で行われた西日本国語国文学会での発表をまとめたものである。席上、多くの方々から有益な指摘をいただいた事を紙上をかりてお礼いたしたい。

(1) 「狐の手套」(昭和八年五月「セルバン」発表)の一節。

他に、「堀辰雄の小説的想像力の起点は、屢々ある風景であつて、たとえば「菜穂子」の水室の場面はまず水室のイメージが作られ、そこから早苗が、そしてその相手として明が想起されていったとの中村真一郎の論文(『堀辰雄』、『国文学』昭和五十二年七月号)などもあり、堀の作品において、語句に注目しての分析が有効であることがわかる。

(2) 横光利一、江川書房刊「聖家族」序、昭和七年二月

(3) 昭和十六年三月・『中央公論』第五十六卷第三号に発表。この作品に四つの形があることは福永武彦が「菜穂子」創作ノオト考(昭和五十三年、八月麦書房刊「菜穂子」創作ノオト及び覚書所収)で指摘した。今回は第二の形「二部作・菜穂子」のうち、「菜穂子」の部分だけに考察を試みた。

(4) 論の使宜上、各節の初めに「眼ざし」「目」「目つき」及びそれに準ずる表現の有る箇所を挙げたが、眼が一般的な意味で使われている場合「目をそらす」等は除いた。「見つめる」「見やる」等類似の表現も多いが、今回は対象から除くことにした。また、当然その眼ざしが誰によって見られ(語られ)ているか、という点が問題になってくるのだが、今回の考察ではその点について考慮していない。問題が残る所であろう。なお、用例の上に記した数字はその表現が出てくる章、( )

内に記した人名等はその眼ざしで見ている対象である。

(5) 竹内清巳「堀辰雄『菜穂子』論——存在要式の極北——」(語文論叢、

昭和五十一年五月)では「菜穂子の孤独自体、虚無自体となった存在の様態を極点で結晶させるためのことばが、『空』の眼ざしなのである。」とし、菜穂子が人間存在の極北を象徴しているとされている。

(6) 引用は順に以下の通りである

加藤周一、角川文庫版『菜穂子』作品解説

三島由紀夫、「現代文学は古典たりうるか」、昭和三十二年九月、新潮社刊

遠藤周作、「テレビズと菜穂子と」、昭和五十九年八月、『新潮』

この他にも同種の批判は枚挙にいとまがない。

(7) 田中清光「『菜穂子』の完成」(堀辰雄——魂の旅「昭和五十三年九月、

文京書房)同書の以下の指摘も合わせ読んでいただければ趣旨は明快であろう。

「彼を本当に俗人として描くのであれば、病院経営や入院費用、体裁という方面に関心をよせ、会社の仕事で頭から離れないようにすればいい。にもかかわらず、彼は菜穂子について考え、『生と死の絨毯』という生の本質を見ている。」

(8) 遠藤周作「実存の悲劇(都築明の旅)」(堀辰雄論覚え書)、『高原』昭和二十三年七月) ただし『堀辰雄』(昭和三十年十一月「古堂刊」)に

よった。